



ホテルなど一時宿泊所の確保を求めて 東京都へ申し入れ

12月2日、反貧困ネットワークは支援団体や都議、市区議と連携して東京都の生活困窮者支援に関する緊急の申し入れと交渉が行いました。路上から生活保護を申請した場合に、各市区の福祉事務所が無料低額宿泊所（無低）への入所を強制する状況が再び生じているからです。

→詳しい申し入れ内容や報告は以下のURLまたは右のQRコードからアクセスできます。

<https://hanhinkonnetwork.org/archives/1224>



12月12日



◆「無低」とは何か？その実態は

交渉では支援団体から、無低の実態が具体的に明らかにされました。無低は首都圏や名古屋の都市部に存在します。無低業者はアパートを一棟まるごと借上げ、福祉事務所から生活保護申請者を受け入れます。業者が駅周辺を回り、路上生活者に声をかけて入居させ、生活保護の申請をさせるケースもあります。実際に駅周辺を回るのは小遣いを渡された入居者だったりします。部屋は個室の場合もありますが、簡単な仕切りだけの簡易個室や8畳間に二段ベッドを2つ入れて4人部屋とするなど相部屋も少なくありません。相部屋はいまコロナの深刻なまん延場所となっています。食事が出ますが、カップラーメンだけだったり、入居者が持ち回りでつくらされたりする場合があります。食事を出すのは、入居者から保護費のうち、家賃分の住宅扶助費だけでなく、生活費分の生活扶助費からも徴収するためです。徴収後、本人に一日600円とか、ひどい場合は月4,000円しか残らないというケースもあります。これでは仕事探しもできず、自立などできようもありません。「寮長」が暴力的に入居者を支配する所もあり、「反社会的勢力」との繋がりも指摘されています。

無低は、アパート転宅までの一時的な居所という扱いですが、上記の状況ではアパート探しもできません。またアパート転宅には福祉事務所の許可が必要ですが、放置されてしまう場合が多く、なかなか抜けられません。そうやって貧困ビジネスの餌食になり続けるのです。

結局はストレスに耐えかねて逃げ出すことになりませんが、その場合、別の福祉事務所で申請しても、「無低から逃げ出した」という理由でアパート転宅が認められず、また無低に送られてしまうという悪循環に陥ります。最後は、二度と生保など利用するか。となり路上で寿命を縮めることになってしまいます。

◆路上からアパート転宅への道

生活保護法30条の規程により、申請者に無低のような施設への入居を強要することはできません。しかしコロナ以前は、路上やネットカフェからの申請は、無低でなければ申請を受理しないという違法な対応が、どの自治体でもまかり通っていました。

コロナ禍において、比較的若い層で生活保護の利用者が増えてきたこと、ネットカフェにも休業要請が出て「ネットカフェ難民」が放り出されるおそれが出てきたこと、無低の相部屋がコロナ

のクラスターとなりうるということが問題になりました。厚生労働省は2020年春くらいから事務連絡を出し、無低の強要はできないとしたうえで、アパート転宅までの一時的な居所として、ビジネスホテルや簡易宿泊所などを確保するよう自治体に要請しました。

東京都は、コロナ以前から、「ネットカフェ難民」対策として、仕事はあるが家を失った方向けに期間限定でビジネスホテルや借り上げたアパートを無料で提供する「チャレンジネット」という取り組みを行っていました。コロナ禍において、これを失業者にも拡大しました。また、ビジネスホテルを路上から生活保護を申請した方の一時的な居所としても使えるようにしました。これにより都内のいくつかの自治体で、一旦ビジネスホテルに入ったうえで保護決定を受け、その後アパートに転宅するという道が開けました。

◆コロナ禍不況は終わったとの誤った認識

しかし、この11月になり、ビジネスホテルの提供を事実上やめてしまったのです。都内各市区の福祉事務所では、簡易宿泊所やネットカフェの一時使用も拒否し、機械的に無低に送る対応が復活しています。東京都の対応は、ビジネスホテルの提供を制限する厚労省の今年10月の事務連絡に端を発するものです。閑古鳥が鳴いていたホテルに客が戻り、価格が高騰していることも背景にあるでしょう。しかし交渉を通じて、行政の側に、コロナ禍で仕事が見つからない状況はもう終わりだとの誤った認識があると感じました。現場の感覚は逆です。物価高と続く不況で困窮者はますます窮地に追い込まれています。交渉は平行線でしたが、年末年始の一時宿泊所の確保については引き続き検討を行うことにしました。

「貧困問題の抜本的解決を求める院内集会 & 対話集会」

10月20日に「生きさせろ! コロナからもうすぐ3年 出口の見えない困窮者支援 貧困問題の抜本的解決を求める院内集会 & 対話集会」と題して、支援現場から政策課題を明らかにし提言、政府の省庁との交渉を衆議院第一議員会館で行いました。



◆要請項目に関して

【生活全般】【居住問題】【生活保護法】【住宅喪失者への対応】【生活困窮者自立支援】【学生】【インボイス】【女性支援】【難民・移民】の項目に分け全28項目の要請を行いました。

➡詳しい要請項目、各支援現場からの報告、各省庁からの回答などの資料は、以下のURLまたはQRコードからアクセス、閲覧ができます。

<https://hanhinkonnetwork.org/archives/1079>



10月20日資料

➡院内集会 & 対話集会の動画は、URLまたはQRコードからアクセスできます。

<https://youtu.be/paXeGCdtXZ8>



10月20日動画

◆院内集会 & 対話集会の報告

最近では駆けつけや生保申請同行以上に弁護士事務所での債務整理や貧困ビジネス被害対策、住居追い出し案件の相談が多い。昨日夕方まで訪問したがクリニック同行も増えている。家族関係やブラック労働で追い詰められた相談者が70%を超えている。「生きていく中で良いことなんか一度もなかった」誰かを殺めて、加藤智大さんのようになりたい。人生に希望なんか持っていない。ネットの中だけが逃避できる場所。「僕たちの将来は終わることのない貧困と絶望」疲弊する

支援現場、この現状を国会議員にも知ってほしい、一緒になって政策を変えてほしい、省庁も現場の悲鳴を聞いてほしい。そんな思いを込めて開催した今日の集会、省庁とは対決ではなく「対話」したいと思った。しかし集会前に出揃った各省庁の事前回答書の中身に判っていたといえ虚し過ぎる冷たい回答であった。これでは「対話」の出発点にすら立てない。そんな思いで集会を始めた。

宇都宮理事長挨拶の後、私、瀬戸事務局長の駆けつけ支援と反貧困ネットワークの支援事業からの提言、外国人支援担当 原文次郎さんの「追い詰められる在留資格のない外国人支援」在日外国人支援の現場、猪股正弁護士さんの「コロナ災害を乗り越えるいのちとくらしを守る なんでも電話相談会相談会からの提言」、寺内順子さん(大阪シンママ応援団)のシングルマザーアンケートの分析レポート、小泉なつみさん(ストップインボイス)のインボイス制度実施に向けての報告、雨宮処凛さんの女性の貧困レポートが報告された。

来年1月から、特例貸付金の償還が始まる、私たちの支援現場の相談内容が更に広がり深刻になっている、貸付金を返済できない。もう家賃が払えない。今日の早朝も相談メールにこう書いてあった。「もう首を吊るしかない」生活保護と破産処理の組み合わせで相談体制の強化が求められている。生活保護の制度改善も求められている、不動産や自動車、生命保険など資産調査を緩和して生活扶助費だけでも利用できるように、物価上昇のなか、生活保護費を引き下げるのではなく引き上げること、早急に家賃補助制度や公営住宅に居住貧困に追い込まれている方が入居できるように、生存権が奪われている仮放免などの外国籍の方の生活保障、せめて医療費支給がないと死んでしまう、もう生きられない。

野党政治家は、維新を除いて全ての政党が参加してくれた。しかし国会会期中で忙しいなかで短時間しか時間が割けない。支援現場の報告を聞き、対話する場が必要、「反貧困国会議連」をつくり定期的に協議し共に政策をつくる場がいよいよ必要なんだと思う。国会議員の挨拶が多く省庁との話し合いが短時間となってしまった事が悔やまれる。

それにしても省庁の回答は一言でいえば「ゼロ回答」物価上昇での生活苦についても現状を共有していると思えない回答、「生活保護は自立できる方を対象にしている」と一部厚労省官僚の発言もでてしまう。貧困ビジネスや無料低額宿泊所の現状を説明しても反応しない。これでは対話にならない。一緒に現場を見たとうで状態を共有する事を基本とした「対話」現場で何が起きているのか確認しあわない限り、現状はいつになっても変わらない。それにしても在留資格を許可しないで入管に収容したり仮放免状態の方に対しての生存権を否定して「生きる権利を日本国籍と同様に与える事の不均衡」「送還すべき対象」と平然と回答されたら「対話」にならない。

基本的人権がはく奪された外国人に「嫌なら帰れ」11月2日に移住連・アミーゴス・反貧困の三団体共催の「政府交渉」で更に「生きる権利」を求めていくしかない

(瀬戸事務局長 支援活動日誌より抜粋)

生きられない！在留資格のない外国人の生存権を求めて

11月2日に「生きられない！在留資格のない外国人の声と支援現場からの提言」と題して、在留資格のない外国人の生存権を求める院内集会と政府の省庁との交渉を衆議院第二議員会館で行いました。主催は、反貧困ネットワーク・移住者と連帯する全国ネットワーク・北関東医療相談会の3団体です。



◆在留資格のない外国人たち

日本には、難民の申請をしても認定されない、就労ビザが切れ更新が認められないなどして在留資格を失いながらも自国に帰ることができず、日本での生活を継続する外国人の方が大勢います。在留資格がない外国人は、原則として法務省出入国在留管理庁(入管)の外国人収容施設に収容されることになっています。施設は劣悪な環境で、十分な医療も受けられず、そのために亡くなる方もいます。

入管は一部の収容者について「仮放免」という形で、施設での収容を解き社会生活することを認めており、特にコロナ禍のもとで仮放免許可の件数が増大しました。しかし、仮放免の方の就労は認められておらず、健康保険に加入することもできません。移動の自由がなく(県をまたぐ移動は入管の許可が必要)、生活保護も受けられません。その結果として、食べられない、家賃が払えない、病院に行けない状態に置かれています。まさに「生きられない」状態です。「生きられない」という当事者の悲痛な叫び。それを支える民間の支援は、人もお金も限界にきています。国はいつまで民間に支援を押し付けるのでしょうか。

◆当事者からの訴え…未来や夢も見ることができない！

Mさんは日本で生まれ育った大学3年生です。入管から家族全員で母国に帰るよう言われていますが、母国で生活したことはありません。家族全員の在留資格を求めて約10年間闘っています。周りの友人たちは就職活動を始めていますが、身分証明がなく、働く権利のないMさんは、アルバイトすらできません。インターンシップでいろいろな職場の体験をし、働く将来を想像しますが、すぐに全てが許されない現実には引き戻されます。未来や夢も見ることができません。

Mさんと同じように日本で生まれ育った高校生からも訴えがありました。この国で普通に暮らしていけると思っていたのに、自分が置かれている立場を知り怖くなった。見えるはずの将来が何もない。友人も離れていく。いつも苦しい。

Kさんは「混合性難聴」になり、耳鳴りも酷く、手術をしないと生活できない状態になりました。無料低額診療制度を活用しても手術費用の見積もりが150万円でした。仮放免となり施設から出ると高額な医療費を払うことができないので医療にかかることができません。NPOの支援でようやく手術を受けることができました。Kさんは「私たちは、在留資格を失っただけで、権利と尊厳のある人間です」と訴えました。

◆民間からの寄付・助成金による支援だけではやっていけない

主催した3団体から、在留資格のない外国人の生存を支えるために、寄付・助成金により2020年4月～2022年9月の2年半で行った支援は、総額1億7324万円に及ぶとの報告がありました。シェルター経費や家賃支援が18%、食費など生活費が68%、医療費が14%。しかし、民間の支援団体にたどり着き、支援を受けられるのは、ごく一部にすぎません。支援にたどり着いても、頭を下げてお願いをして支援を受けることによって生存をやっと維持できる状況で、人間としての尊厳を保つことはできません。国はいつまでこの問題を民間に押し付けるのでしょうか。入管には在留許可を出して欲しい、せめて就労ができるようにして欲しいとの訴えがありました。

◆政府交渉では血の通った話し合いが全くできない

政府交渉では、「生きられない!」という現実を具体的に訴えました。しかし省庁の担当者は、「仮放免中の生計は、本人の資産や身元保証人、ご家族等の支援によって賄われることを想定しています」という回答書の文言を繰り返すだけでした。「想定しています」と言っても現実にはそうならないと訴えると、個別案件については答えられないと逃げます。入管は、審査して仮放免の許可を出しているのに、資産がないことも身元保証人が生活を保障できないことも、家族の支援がないことも分かっているはず。主催者側は、「個別案件と言うが、現実に生きられない人がいる。それをどうするのか。放置するのか。」と突きつけましたが、「個別案件はご相談を受けながら…」との回答があるだけでした。

司会がしびれを切らせて、「もう一度省庁交渉をします。次回は、責任のある方、回答ができる方が出席してもらいます。この冬、物価も上がり本当に生きられないのです。具体的に対応をお願いします」と述べ、国会議員にも協力を依頼し終了しました。法改正による制度変更を待たなくても、行政措置による運用で今すぐできる対応があるはず。人の命がかかっています。待ったなしの対応が必要です。

第二回「難民・移民フェス」開催しました！

11月23日に反貧困ネットワークも一員である難民・移民フェス実行委員会主催で、埼玉県川口市川口駅前の川口西公園にて「難民・移民フェス」を開催しました。第1回目は6月4日東京都練馬区練馬駅前の平成つつじ公園で行いました



◆当日の様子

終日雨天予報が見事に的中、雨にもかかわらず来場者は約1200人、約50人の難民や仮放免者の方にお手伝いいただきました。

皆様からのご寄付、チャリティの売り上げは合計4,565,190円でした(第1回の繰越金含む)。

今回の会場費や準備費に83万円充て、残りを難民・仮放免者の支援(衣食住のサポート、医療費、学費の補助など)に利用し、今後の企画運営に活用いたします。

色々な国の郷土料理、温かいチャイ、かわいらしいアクセサリーや小物の手作りの作品など出店は25ブースほど。歌や演奏、ダンスなどのイベントブースや公園の真ん中には温かい飲み物と交流が出来るカフェ休憩スペースなど盛りだくさんの内容でした。

イベントを準備してきた難民移民の皆さんは当日朝まで仕込みや準備、実行委員会では、地元の「在日クルド人と共に」と連携して体制をつくってきました。在留資格も与えられず、働くことも許されず、医療にもかかれない仮放免状態が続く。いつもは沈みがちの表情ばかりだが、みんなが笑顔で嬉しそうにしていました。

反貧困ネットワークの役割はシェルター入居者の出展支援、生活相談、パルシステム埼玉とフードバンク埼玉と連携した400食の食料配布を担当しました。前回の練馬ボランティアスタッフも駆けつけてくれて応急テントでの袋詰めと配布、とりあえず無事に終了。悪天候もあり大量の売れ残り販売品の明日以降の受け入れと配布食料を事務所にどうやって持ち帰るか、覚悟はしていました。

11時になると次から次に人が訪れ、あっという間に広い公園が来場者で埋まり、数メートル先が見えないぐらいの状態になりました。皆が満面の笑みと喜んでいる姿が見れ、何より嬉しいのはこんなに応援してくれている仲間がたくさんいることでした。

全てが手作りのフェス、ひとりひとりの想いが繋がり、形になりました。感動的な経験、さて次はいつ頃、どこでやろうかと実行委員会の論議がまた始まっています。

➡「難民・移民フェス」の詳しい情報は以下のURLまたはQRコードからアクセスできます

<https://note.com/refugeemigrant/>



難民・移民フェス

「仮放免高校生奨学金プロジェクト—私たちはあなたを見捨てない」

12月12日に移住者と連帯する全国ネットワーク貧困対策PTと共同主催の「仮放免高校生奨学金プロジェクト—私たちはあなたを見捨てない」の記者会見を行いました。

チューターを務める大学生4名も参加をしてくれました。



仮放免の子どもたちは、親が働くことを禁止されているため、極度の貧困状況を生きています。義務教育期間中は、給食や体操着などに対して就学援助を受けられますが、高校からは就学支援金の対象にはなりません。そのために進学をあきらめたり、中退を余儀なくされる子どもが多くいます。

さらに入管は、「日本にいてはいけないのだから、勉強してもしょうがない」と、やる気をくじいて追い返そうとします。しかし、出身国に帰れるならとつくにそうしており、日本でしか生きられない高校生の将来を切り開くために何かできないか。このプロジェクトは、そうした思いから始まりました。自分は存在してはいけない、と日々思わされるつらさを多くの人に理解してもらい、仮放免高校生とその家族の在留資格正規化につなげることを目的としています。

2022年4月時点で関東地方在住の日本の高等学校に在学中の仮放免の方を対象に
2023年1月～次年3月の期間、月1万円(公立高校1か月分の授業料)の奨学金を給付します。

➡詳しい情報は以下のURLまたはQRコードからアクセスできます。

<https://hanhinkonnetwork.org/archives/1119>



高校生プロジェクト

◆記者会見の様子

このプロジェクトは給付金を渡すだけでなく、学校や勉強、将来など、日常的な相談相手になります。奨学金に加え、学用品・被服など高校生活の必要品の購入支援、フードバンクとの連携による食料支援もおこないます。

記者会見では大学生の「チューター」4名が参加してくれました。元仮放免高校生4名が自身の高校生時代の経験を踏まえ届けてくれたメッセージの代読をしました。

“高校生の時は色々な制限が多く、手続きのために何度も学校に遅刻をしていた。仮放免の人の学習支援制度があったらいいと思っていた。高校卒業後に在留資格を得ることができた。今まで見えない何かで縛られていたものが一気に無くなり、精神的苦痛も徐々に和らいでいきました。”

“在留資格がないことで、自由のない生活を送っている高校生はたくさんいます。そのような子達に手を差し伸べ、少しでも、その子達の将来の夢や希望が叶うサポートをしていることをとても嬉しく思い、感謝の心で一杯です。この支援はその子達の成長に繋がり、より豊かな未来を描ける第一歩になると思います。”

“みなさんが大好きな夢の国にも、簡単にはいきません。友達に誘われても、「ごめんね、行けないんだよね」と言う事しかできませんでした。「なんで?」と聞かれても、ちゃんとした理由を答えることができませんでした。好きな物を買うことができなかったり、部活なのでみんなでお揃いのものを買おうってなった時もすぐに買うことはできなかったです。

自分の両親が仕事をしないって言うことが、時々自分にとって不利になってしまうことがあります。でも両親を恨むこともできないので心の中で「しょうがないから我慢しよう」と言い聞かせる事しかできませんでした。”

“在留資格を持つことができないのは高校生たちのせいではありません。日本人やビザを持っている子どもたちと同様、彼らにも将来の夢があると思います。なかなか自分たちの声を発信できない子が多い中、勉強を頑張り夢に向かって前進する高校生を応援する方々に感謝しています”
(メッセージは一部を抜粋しています)

チューターを務める大学生たちは何回も強調しました。「支援する側と支援する側を超えて双方向でつながり、一緒に前に進んでいくような気持ちで取り組みたい」大学生たちが目指す伴走の考え方、若い世代が語る今後の関係性の希望が未来を拓く。

◆奨学金プロジェクトへ寄付金のご協力をお願い

◆払込用紙◆

口座番号:00170 - 5 - 594755 加入者名:一般社団法人反貧困ネットワーク

※通信欄に「奨学金」(表記は問いません)と必ず記入ください

(同封の用紙では、番号の寄付先を選択せず空いているスペースに記入ください)

◆銀行振込◆

ゆうちょ銀行 ○一九(ゼロイチキュウ)店 当座 0594755

※備考欄や氏名の後ろなどに「奨学金」(表記は問いません)と記入ください

◆ホームページから寄付◆

【一回の寄付】の項目からお手続きください。

※備考欄に「奨学金」(表記は問いません)と記入ください

仮放免高校生奨学金

プロジェクト

—私たちはあなたを見捨てない—

◆募集期間◆

2022年11月10日(木)~2023年1月6日(金)

◇主催◇

一般社団法人反貧困ネットワーク

NPO法人移住者と連帯する全国ネットワーク

貧困対策プロジェクト



「反貧困ささえあい基金 反貧困犬猫部より活動報告」

今年6月、事務局長の携帯電話に連絡が入り、犬2匹の一時保護ができないかと相談がありました。飼い主様が、命にかかわる重篤な病気で入院治療が必要とのことでした。一時保護の最終調整中に、飼い主様の病状が悪化し、連絡が取れなくなったことを心配した行政の担当者が警察官と部屋に立ち入ったところ、飼い主様は部屋の中で倒れており緊急搬送されました。

翌日、当団体のスタッフが飼い主様の部屋へ駆けつけると、2匹とも部屋の中で静かにしていました。ただ、フードと水の容器が空になっており、窓が少し空いていたもののエアコンはついておらず、連日30度を超える暑さの中、救出が少しでも遅れていたら最悪の事態となるところでした。その後、飼い主様の容体は安定しましたが、健康状態や生活状況等の理由により飼い続けることができないため、当団体を通して里親を探してほしいとの連絡をいただきました。その後、皆さまのご協力もあり里親希望の方からお申し出があり、トライアルが決まったと、前号でご報告させていただきました。

飼い主様との突然の別れという悲しい経験をした2匹ですが、幸いにも、理解のある里親様が見つかり、それぞれ、新たな生活をスタートすることができました。2匹が新しい家族と幸せな犬生を送れることを願います。

ボーダーコリーのGくんは、新しい家族に見守られながら、毎日、楽しく散歩をしたり遊んだりしています。先住犬との距離も少しずつ縮まっており、兄弟のように一緒に過ごせる日も遠くないでしょう。

【ボーダーコリーの里親様より】

この度は、素敵な縁に恵まれ、可愛い可愛いGくんに出逢い、我が家に迎え入れることが出来ました。とても嬉しく感謝いたします。



ミニチュアシュナウザーのHちゃんは、新しい名前をつけてもらい、優しいご夫婦から愛情を一杯もらいながら、毎日元気に過ごしています。

【ミニチュアシュナウザーの里親様より】

毎日の散歩で私たちも規則正しい生活を送るようになりました。Hちゃんと明るく楽しく生活していきたいと思います。本当にありがとうございました。

貧困ジャーナリズム大賞2022の授賞式にご参加ください

貧困ジャーナリズム大賞2022授賞式を以下の日程で実施します。
作品を推薦・応募していただいた皆さまありがとうございました。
今回集められた全46作品から、大賞・特別賞・ジャーナリズム賞を審査員が選定します。

◆貧困ジャーナリズム大賞2022授賞式◆

日時:2023年1月24日(火) 19:00~21:00

場所:文京シビックセンター26階スカイホールにて

- ※ 一般のご参加には必ず申込みが必要です。以下からお申込みください。
申込みは定員に達し次第締め切らせていただきます。
<https://forms.gle/iLPBZEX4hUEXM8Hh6>



申込フォーム

- ※ 当日は、授賞式とパネルディスカッションを行います。
このうち授賞式の模様を中継・録画配信します。
どなたでもご視聴いただけます。
<https://youtu.be/hVhuV-9cqEk>



YouTube中継

- ※ メディア取材の方、受賞者関係者の方、スタッフの方は申込みフォームを使わず、
以下に「件名:貧困ジャーナリズム大賞」としてお問い合わせください。
info@hanhinkonnetwork.org

◆寄付のお願い◆実は反貧困ネットワークの財務がピンチです

反貧困ネットワークの財務が急激に悪化しています。
反貧困ネットワークの活動資金はみなさまからの寄付で賄われています。経済は戻りつつあるとされていますが、現場でのSOSは減る気配はなく、丁寧な伴走が必要な事例はむしろ増えています。

駆付け支援の給付金、26室のシェルターの維持管理費、事務所家賃及び光熱費、駆付け支援に生保同行にシェルター管理にと日々走り続けるスタッフの人件費など、月々最低でも400万円はかかります。

一方で、コロナ禍での生活困窮者問題の報道が減ったこともあり、いただく寄付は激減しており、月100~200万円程度の状況で、今年度に入って赤字が続いています。

みなさまからの継続的な寄付をお願いします

赤字分は昨年度までのストックから切り崩していますが、活動を継続的に行うためにも、心苦しいのですがみなさまからさらなる寄付をお願いいたします。

月500円の継続寄付もできます。

寄付を募るチラシを同封いたしました。ぜひまわりの方にも広めていただければと思います。